

スポーツボランティアフリートークフェスタ 要録

平成20年12月14日(日) 仙台市市民活動サポートセンター

基調講演 「スポーツとボランティアのまち」

講師：宮城テレビキャスター 竹鼻 純 氏

昨日はとても残念でした。仕事で磐田へは行けませんでした。職場のテレビで応援しておりました。最後はマンチェスターユナイテッドの欧州チャンピオンズリーグのような、大逆転を期待していたのですが、ベガルタのJ1昇格はなりません。

ベガルタについては泉田さんにもご紹介のあったとおり、とても縁が深いものですから残念でなりません。

昨年定年を迎えましたが、それまで36年間、ずっとスポーツにかかわってきました。今日のテーマである「スポーツとボランティア」のお話をするのに私がふさわしいかどうかは分かりませんが、宮城県のスポーツについては1972年に入社して以来ずっと携わって参りました。スポーツの実況についても十数年前まで経験しています。

サッカーについてはベガルタの前身、ブランメル仙台がJFLに昇格した試合の実況中継が最後の実況でした。この試合はJリーグチームが東北にできるかどうかというプロジェクトの存続自体の重要な試合でした。

大変に厳しい状況の中での2試合を担当したのが、私の最後の実況中継でした。私は若いころはナマイキで、宮城県のスポーツ状況をなんとか変えたいと思っておりました。当時の宮城県のスポーツというのは国体の都道府県順位は47都道府県中、毎年40位前後でした。それをなんとか変えたいということを実際に思い、手始めとして、午後からのニュース番組で毎日スポーツを取り上げ、関心を高めようとしてきました。

当時、県内にプロスポーツはありませんでしたので、ほとんど高校生のスポーツ、それに社会人のアマチュアスポーツが中心でした。全国的にプロスポーツは野球に情報が偏っている状況で、社会人でもバレーボールやバスケットボールなどの日本リーグに所属しているチームすら県内にはなかったため、目を付けたのが東北電力のサッカーと七十七銀行のバスケットチームで、ぜひ全国リーグを目指して欲しいと関係者をお願いしていました。

そのうちにスポーツコーナーは、ある程度視聴率がとれるということが分かり他局でも設けるようになりました。

サッカーとの出会いは全国高校サッカーの宮城県予選の中継からですが、宮城県サッカー協会の当時、理事長だった伊藤孝夫先生と知り合いになり、「サッカーとは世界で一番盛んなスポーツだ」といわれ、野球と全く違う世界観にひかれるようになりました。

そのうちに宮城テレビの亀井社長にサッカー協会会長就任の話があり、引き受けて頂くよう説得しました。そしてサッカー協会に自分も携わるようになりました。

当時サッカーはマイナースポーツだったのでそれほど負担にはならないだろうと高をく

くっていました。しかし、92年ごろから、各地で、プロサッカーチーム結成の動きが具体化しJリーグ設立への動きが活発になってきました。遅れてはならじと、宮城県協会もチーム結成へ向けて、署名活動を始めました。実はここからが大忙しでたいへんでした。市民も運動に加わり、最終的に三十三万人の署名を宮城県庁に持ち込み、ブランメル仙台結成の原動力となりました。

そのうちにワールドカップ招致活動が始まり、いつ本業の仕事しているのかといった状況でしたが、今日のプロスポーツ繁栄への過程として、とても幸せな時期だったなと思っております。W杯・国体・インターハイ・ブランメル仙台（後のベガルタ仙台）の誕生と宮城県におけるスポーツを取り巻く環境が一変し、スポーツ報道も過熱してきました。

宮城県サッカー協会に対する要求も高くなってきましたが、県サッカー協会はもともとボランティアで結成されており、苦しい部分もあります。

一方、日本サッカー協会はプロで構成されており、様々な指示が毎日県サッカー協会に飛んできますが、こちらは専従者が少数しかおらず、日々闘いながら活動しております。

そうして宮城県のスポーツもいい方向に進んできたのですが、当時の中心であった利府のサッカー場は3千人の収容人数で、それでもブランメルは当時としては圧倒的な動員数でした。

そんな折、七北田公園にサッカー場を作る計画を聞き、なんとかJリーグ仕様にしてもらおうということになり、サッカー協会会長と当時の石井市長に陳情にいきました。

どうせ作るならいいものを作ろうということで、当時の市の公園課も熱心に取り組んでくれ、鹿島スタジアムなどの資料などを参考に、様々なアイデアを出し合いました。Jリーグブームを追い風にして、いろんなことがいい方向にいった結果、スポーツ状況が変わったということです。

その後ベガルタ人気が発爆してJ1昇格などもあり、チケットが買えないという状況にまでなりましたが、この成功がさらに受け入れる仙台の土壌になり、楽天・89ERSの参入などにつながったのは、いうまでもなく市民・ボランティアの皆様のお蔭であります。

大会運営からエコ活動まで大きな役割を果たしているボランティアなしでは宮城県のスポーツはなりたないということは疑いようのない事実です。

仙台のこのようなスポーツ状況は全国に自慢できる状況です。これからも4つのプロスポーツを支えていける地域であってほしいと思います。

また変われば変わったで、いろんな問題もあり、現在はアマチュアスポーツについてなかなか情報発信できないというのが悩みです。地方の放送局は規模に限りがあり、スタッフも機材もいっぱい、いっぱいの状態です。イベントは土日中心、放送は平日の昼間ということで休みがとれない状態であり、プロスポーツが充実する一方で、それを支える人が不足している状況です。

以前は荒川静香、宮里藍などの無名時代の取材記録があり、中・高生を取材し激励することが、選手への動機づけにもなっていたが、そういう役割が果たせなくなってきていま

す。河北新報が一番頑張っていますが、それでも一時よりは減ってきていると言えるのではないのでしょうか。

スポーツは、「する、見る、支える」で成り立っているといわれていますが、固定化しつつあるのではないのでしょうか。本当は、もっとくっついていなければならないと思います。する人が見る、見る人が支える、支える人がするなど、相互に流動性があった方が、発展性が出てくると思います。

県サッカー協会も固定化が進み、問題になっております。指導する人がいつも決まってしまう、選抜チームの指導者なども重なってきています。ボランティアの方も同じだと思いますが、同じメンバーでの居心地の良さもあり固定してしまう傾向にあり、新しい人を入れていく工夫が必要だと思います。

一方で長期的な話をすると、スポーツをする子供たちが減っています。子供たちのコミュニケーション能力が落ちており、外で遊ぶことも少なくなっています。まず「する」からスポーツの楽しさを教え、引っぱり出すことが大事です。

スポーツは見る人が増えればする人も頑張り、する人が増えればしっかり支える人を増やす必要がでてきます。そのように相互に連動しているものなのです。

最後にあえて感じたことを言うと、今のボランティアには自分は参加しない気がします。というのも、自分は試合をどうしても見たいからです。

日本のボランティアは堅苦しすぎる部分があると思います。

ローテーションで、ボランティアも競技を見られる日を設けるなどの配慮があっても、いいと思います。

またこれは経営側の問題ですが、ボランティアは問題点をよく知っているので、球団側がボランティアの意見をきくシステムをつくるべきだと思います。

すべてが改善されるわけではないが、1つでも2つでも実現していけばよいと思います。

今から、来年のサッカー野球のシーズンが楽しみです。自分でも本当に好きだなと思うのですが、毎日夜になると楽天の試合を見ていて仕事が進まないほど応援しているので、来年はぜひ頑張ってもらいたいと思っています。